

「そら解らん、先の佛の日か知らんが、肴屋が過去帳を持つて廻つてエへん、持つて歸ります」

「魚喜、また持つて出て來た、ハ、ン解つた。今月は大分拂が多いのでお前捌いてるねナ」

「モシ大將、うだ／＼云ひなはんや、お宅に何程懸が有つても其様な事にビクつく魚喜と違ひませ、魚喜魚でつめと仰つしやつたら、お宅を肴で詰めますせ」

「そんなら持つて這入らんか」

「持つて這入りますけども……」

「オ、嫌や、また持つて這入つて來てやつたな、ア、解つた。魚喜さん貴郎賣押ししてやんやな。宜しい其鯛置いときははれ、其の替りに、毎月朔日、十五日の焼物は妾が誂へるのやで、他の肴屋に頼みます」

「そんな事をしられたら、薩張りワヤや、持つて歸ります……」

「また持つて出て來た」

「お家が、其の鯛置いとくねやつたら、朔日十五日の焼物は他の肴屋へ誂へると」

「宜いやないか、他の肴屋へ誂へて貰へ、錢は俺がお前に拂ふて遣るがな」

「ア、さよか、そら品物が、いらすに錢が貰へる、是程結構な事あれへん……」

「また這入つて來た、お清其處に煮湯が有つたら、魚喜の頭から掛けなアレ」

「フワイ」

「魚喜何うした」

「頭から煮湯を掛けると」

「彼奴あいつが云ふたか」

「へエ彼奴が」

「お前が彼奴と云ふ事が有るか、ヨシ持つて這入れ」

「イヤおきます。今度持つて這入つたら頭から煮湯を掛けられますがナ」

「宜いがナ」

「ナンノ宜い事おますかいな、貴郎は何うもないが私は頭から煮湯を掛けられたら、頭がずる／＼に秃げて仕舞ます」

「俺が附いて這入つて遣る、鯛を持つて這入れ」

「貴郎がついて這入つとくなアつたら宜ろしいけどもナ、私一人やつたら……」

「魚喜何をしてるのんや」

「あんまり鯛の頭へ手鍵を打つたんで、頭がグヂャ／＼になつて手鍵が打てまへん」  
「提げて這入れ」